

### 三部門入賞・入選

畑 忠幸 (留萌)

一九六七年に、灰色の諧調を求めて、「天塩路」(阿部清晴写真展)モノクローム作品(ニコンF・ニコンSP)を見て、モノクローム写真に魅了されました。カメラはニコンF、写真はモノクロームと勝手に現在も思い込んでいます。

その時の感動の影響が強く、日本海岸道北地方の写真を撮ることが多いです。今回展の作品も、苦前海岸、羽幌漁港、天売島を撮ったもので、この土地の北風景を撮ることが好きです。今回選ばれたことを大変喜んでます。これからは会員の皆さんと楽しみながら、私の感じる日本海岸北風景を表現するのに適した、銀塩モノクローム写真を長く撮り続けたいと考えています。

### 三部門入賞・入選

伊藤三郎 (オホーツク)

七年前友人に誘われるままに、気楽に楽しみたいとカメラを買ったのが、写真を撮り始めたきっかけです。フラインガーを覗くと別世界がそこにあり、たちまち写真の虜になってしまいました。早朝からの仕事一筋の人生を歩んできましたが、この世にこんな楽しく、心踊ることがあるとは知りませんでした。入賞作は、昨年友人より熊がいるぞと携帯がなり、飛んで行って撮った中のワンショットです。顔から始まりさまざまな角度から撮りましたが、身体に似合わない足の裏の繊細さに驚き思わずシャッターを押しました。写真を撮るには人間関係が円滑でなければいけないことも気づかされました。今後は支部及び写友の方々と仲良く、今に満足することなく精進していきたいと思っています。

### 三部門入賞・入選

森木欣一 (旭川)

家族の成長の歴史を結婚記念日に同じ場所で撮り続けていこうと、一眼レフカメラを購入しましたが、最初はシャッタースピードや絞りのことがよく分からず、道新文化センターの写真教室に通いました。ある日、妻に「一度、道新

に出してみたら？」と後押しされ、ダメモトで公募したところ入選に。それがきっかけで平成十四年夏に道写協に入会しました。入賞作「祭りの少女」は、お父さんの肩で祭りを見物している少女が振り向いた時に、太鼓を叩いている人が撥を振りかざしたタイミングを合わせてシャッターを切った一枚です。

次回も三部門に入選・入賞ができるように今年一年頑張りたいと思います。

### 初入選

北構善一郎 (釧路)

定年後、道新の初級カメラ募集の欄が目にと

### 初入選

山本隆晟 (札幌)

子供の頃、台所を暗室に変えて作業をする父を手伝いました。液の中で印刷紙に浮かびあがるモノクロ映像に興味津々でした。プロローグフィルムを買いに嬉々として使い走りしたり、もう半世紀以上も前のことです。

レンズシャッター、ハーフサイズ、一眼レフ、APS、デジタル等カメラは時代と共に機能や形を変え、自分との距離を近くしたり遠くしたりしながらも、いつも傍にありました。サラリーマン卒業を機にカメラとの親密度を増やしたいと思った折から、今回の入選は大きな励みになります。応募作は、快晴の

## 55回展入賞・入選の喜びの言葉

### おめでとう



上から  
山本 隆  
佐藤 健  
佐田 光子  
津田

上から  
畑 忠幸  
伊藤 三郎  
森木 欣一  
北構 善一郎

真夏日に陽差しを避けて絵を描く人と背景の豊平館との明暗差を意識したものです。これからも道写協を更に居心地の良いものにするため皆様と力をあわせてゆきたいと考えています。

### 初入選

佐藤 健 (深川)

深川支部は創立から十六年目を迎え、この間五名の会員が入選を果たしましたが、この度は私が初入選をいただき、やっと写真道展「年生になったところ」です。「供養の宵」は支部の仲間数名で留萌の瀬越浜に出かけた時のワンショットで、遭難者を

### 初入選

笹田 健 (留萌)

慰霊するために三つのお寺の信者さんによって行われた灯笼流しの様子を撮ったものです。辺りには意外に早く暗くなりましたが、自然光のままシャッターを切ることで予想以上の動感を表現できたように思います。この場所は熱心なカメラマンが多く訪れており、種々のコンテストでしばしば作品を見かけるようになりました。

これからは生涯学習の環として仲間と共に楽しみながら活動を続けたいと思っております。

### 初入選

津田光子 (留萌)

兄たちが撮影しているところを見て、これは面白いぞうだ、自分もやってみようと思ったのが、写真を撮り始めたきっかけです。本格的に初めて四十年くらいになります。今回の入選は初めてで、私にとりまして大きな喜びです。今までに数回出品しましたが、なかなか入りませんでした。挑戦にまた挑戦が良かったと思います。動きのある被写体を狙い、トリミングしなくてすむよう、フラインガーをよくのぞいて撮りました。シャッター速度、絞り、レンズを取り替え等工夫しました。今後の抱負では、もう年齢なので体力には自信がありませんので、目が達者な限りはこれからも撮り続けていきたいと思っています。これからもどしどし道展に挑戦します。

四十代になった頃、趣味を持ちたいと考えていた。店頭で一眼レフカメラが目にとまり思わず購入したのが写真を撮るのきっかけとなりました。初入選作「在りし日のタワー」は、修学旅行で函館に引率した際に、五稜郭タワーを撮影したものです。新タワーから眺めた旧タワーは取り壊しの作業が進められていました。全体が入るよう気を配りシャッターを切りました。旧タワーは現在では存在しませんが、人々の記憶や写真などの記録として残っています。

沢山の思い出と緒に写真を撮り、その時々感動を記録として残せるような写真を撮ってみたいと考えております。